

【令和5年度重点目標「目標に向かって、最後まで粘り強く取り組む生徒」】

令和5年度石神中 学校だより

いいところを伸ばす
信頼関係が基本
しがみつき 頑張りすぎずに頑張る
み 自ら学ぶ 自ら考える

令和6年3月11日発行〈号外〉：南相馬市立石神中学校長

「福島に住む私たちは、 当たり前毎日が、明日も来ることではないと 知っている。」

2011年3月11日に起きた「東日本大震災および原子力発電所事故」から13年が経ち、今日からは14年目が始まります。

あの年の3月11日は金曜日で、各中学校では卒業式が行われていました。石神中学校の2年生だったある生徒は、お昼過ぎには下校して一人で自宅におり、14時46分の本震の時も、その後何度となく繰り返す震度5クラスの余震の時も、自分の身を守るのが精一杯で、家中の家具が倒れたり物が壊れたりするのを茫然と見ているしかできなかったと言います。不安でいっぱいになり、家の電話から父親や母親の携帯電話に連絡を試みますが、大災害のパニックで誰もが電話をかけるので、電話回線はパンク状態。初めて父親の携帯電話とつながったのは17時過ぎだったそうです。

石神二小の5年生だったある児童は、校庭で体育の授業中。立っていることも困難な揺れでその場に座り込み、校庭にいくつものひび割れができていく様子を恐怖感とともに見ていたと言います。

翌日の3月12日。双葉郡の学校に勤めていたある教員は、原子力発電所事故の影響で勤務先の学校付近は立ち入り禁止となったため、このときすでに避難所となっていた石神中学校の体育館でボランティア作業をしました。完成して間もなかった新しい体育館の中は、足の踏み場もないほど避難者で埋め尽くされており、校舎の中の各教室も避難所として開放されていました。それでもまだ入りきれない避難者もあり、中学校前のコンビニエンスストアの駐車場に車を停めて、その車の中で避難生活をしている人もいました。

「福島に住む私たちは、当たり前毎日が、明日も来ることではないと知っている。」

これは、今日行われた「3.11ふくしま追悼復興祈念行事」において、福島県知事のメッセージの中で紹介された言葉ですが、本校生徒と同じ南相馬市内に住む中学2年生が書いた「未来への手紙」の一節です。(ウラ面参照)

「お正月（元旦）」という、誰も災害が起きるとは予想すらしていなかったであろう日に起きた「能登半島地震」を目の当たりにして、より一層、この言葉の意味が重く感じられます。

「災いは、忘れた頃にやってくる。」これも私が子どもの頃から言われている言葉です。いざ災害が起きたときに少しでも慌てないように備えておくことや、「当たり前のことが当たり前に見える幸せ」に感謝し、一日一日を大切に過ごすことについて、思いを新たにすきっかけとなる「3.11」としたいものです。



2024年3月11日のメッセージ

地震や津波で大切な家族を失った人。
避難により故郷を離れざるを得なかった人。
遠く離れた場所から故郷の復興を祈り続ける人。

多くの人々の悲しみや葛藤、そして未来への夢や希望。
様々な思いを胸に、今日、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から13年を迎えました。

帰ることが難しいとされていた地域においても、帰還に向けた取組が進んでいます。
「創造的復興の中核拠点」となるF-R-E-I(エフレイ)では、新しい技術の研究が始まっています。
県内への移住者や新規就農者数が過去最多を更新し、県産品の輸出額も過去最高を記録しています。
「ふくしまプライド。」を胸に、決して諦めることなく続けてきた挑戦が着実に実を結び始めています。

一方で、今もなお多くの方々が避難生活を続けている現実があります。
そうした方々の生活再建に加え、減少した人口の回復、生業や産業の再生、そして長期間にわたる廃炉の取組など、復興に向けた困難な課題が山積しています。
さらに、13年という月日の経過に伴い、震災の記憶の風化が進んでいます。

「福島に住む私たちは、当たり前の毎日が、明日も来ることではないと知っている。」

(原町第一中学校 鈴木 真日瑠さん「未来への手紙」)

2024年1月1日、石川県能登地方を震源とする大地震は、多くの尊い命と穏やかな日常を人々から奪いました。
震災によって多くのものを失いながらも、多くの温かさに支えられてきた私たちだからこそ、
災害で苦しんでいる人たちの思いを我が事として受け止め、寄り添っていかなければなりません。
震災の経験や教訓を次世代に伝えていくことは、震災を経験し、今を生きる私たち大人の責務です。
それは福島の復興だけでなく、未来に起こりうる災害から多くの命を守ることに繋がると信じています。

「これから福島をもっと宣伝して、あの寂しい土地がたくさん建物があふれて、
にぎやかになってほしい。」

(白河第二中学校 鈴木 凜さん「未来への手紙」)

今年からインターハイの男子サッカー競技がJヴィレッジで開催されます。
復興のシンボルとなった場所が、全国の子どもの憧れの場所になります。
「福島の今」を知るため、若者たちが被災地を訪れ、直接「見て」「感じて」震災を自分事として学んでいます。
地域の人々との交流の中で互いを高め合い、新たな輝きが生まれる、そうした輪が広がりを見せています。

「これからの福島には、乗り越えなくてはいけないことが沢山あります。

それでも前を向いて、未来のために私ができることを精一杯、取り組んでいきます。」

(白河第二中学校 小針 萌詩さん「未来への手紙」)

私たちはこれからも、光と影が入り交じる福島のありのままの姿をしっかりと受け止め、前へと進んでいきます。
次の世代を担う子どもたちが、夢や希望に満ちあふれた未来を描ける場所にするため、
昨日より今日、今日よりも明日の福島をより輝かせるため、挑戦を絶えず続けていきます。

「県民の皆さんの笑顔を必ず取り戻す」そう心に強く刻んだあの日の決意。

その原点を胸に福島の未来を全力で切り拓いていくことをここに誓います。

令和6年3月11日

福島県知事 内堀雅雄